

新華つみ

下局 暨七月十九日





八月一日

一灯礼の概述

手つゝあるをよみ	野々松のあ	解南
野々松のあ	野々松のあ	源坪
著明くして	冬月あきの源	お載
初縁のゆ	てを世とらう	蓮宗
来り縁のめ	は早	於

新説高下

二 京なるしく夜あり

わさくたやまを華の河し山 於

板阿り存あり花の文なるの 宇山

水よひかき涼しや影の影 前ハシ 菊右

夏を習いわさく里の雲解け 柏葉

わさくしやまの上野の寛永寺 貴季

ふさき入るとはあり花の枝 出月

新緑の花よけも六きりりり 大島

虫阿の衣のまよ解ふ男なる 祖康

三 海草の意

虫啼む玉子の売くひの意 於

四 鳴歸平四時を向よむちりりりり

化し御をく舞の上りお花心

掃よもる花のすさく尺虫の居 華谷

はる八甲の板のま色しほる 五子 基丸

りりりしよのりりりの放下僧 サト 芥剛

とほのう〜 招の雀の道 アハシ 晩

水仙の法のおち スハク 雲河

遊きふんらゆめ カケ川 平

宵おし招 カヒ 半松

五日

也々ア葉あかりれんと木下川のなをき
通うはる〜 涼〜をのこ〜
け〜 涼〜の 花〜 や〜 横〜
ほ〜 彼〜 男〜 女〜
さ〜 女〜 鳥
か〜 床〜
遊〜 金〜

中ひて揚創〜
一〜 中〜
神〜 鳥中〜
慈鳥夜啼〜
権〜

笠雲の〜 鳥 於

ち

夕〜 薬〜

川〜 星の〜 イツモ 曲川

巾着や夕暮所より川邊に イクラニ 梅宿

こころ白雨社堂より一炊らばはるのき

所は静しとてあゝ涼し 几 瓦山

七

稲妻やうきをいづき行くあり オシウ 控

焦き火のひらふよきに量物 アキチ 永之

おききの海をいづき花へ ツシマ 月静

まゆみの下は梨子 ツシマ 若石

結核をもちて花の度 シノ中 芳洲

あ夏のはら シノ中 蓮刈

稲つるの フシコ 素石

眉 フシコ 花夕

お暮の トキキ 孤暁

お暮 トキキ 梅志

八 七日不喰

生賣の トキキ 於

甚荷ふおたは安ふ本權ハ
 後まてそしあまふまらう(海) 吐雪
 明らう物甚あふ紅いゆ厚 川サキ 麦赤
 村の坂のゆらりおけな 借 正解
 ち毎ふふら合のまこ氷室ハ 樺ハマ 一歩
 遊東呂山
 こころとまこころと延くう程くら サト 遠霧
 とおとこのうまの言のふらふ 不及

九の 隔帳
 啼止し飛者のす。いゝな 控
 待宵や又まも。波の音 一八キ 柁臺
 新屋やのまきかきんや。あ 居石
 水鏡のこやうも居や而雪 西京 碩水
 初涼——用心なり。の州の茂 五子 雪漱
 了水道急
 夏ふらうをてる。雲の叩月ハ 忠狂

十二の 契願

有りぬや新敷賣のふし年

於

目利のそまぬる文の花摘竹

ゆき号まこしは着府自ちなりつゝは強り
中らぬくちんはまこしめしはまふ
ゆき号まこしは着府自ちなりつゝは強り
凡ち他はまふぬくまふぬくまふぬく
まふぬくまふぬくまふぬくまふぬく

新進帳のたし極めまふぬくまふぬく
折る花摘海通新進帳のまふぬくまふぬく
まふぬくまふぬくまふぬくまふぬく
まふぬくまふぬくまふぬく

名はつぬまの上の松の乳

一 ぬき山の鳥の徳と徳と
まふぬくまふぬくまふぬくまふぬく
まふぬくまふぬくまふぬくまふぬく
鳥三千羽余はまふぬくまふぬく

おとよのほろほろのついでに大なる例あり
苗のたのむこと

種武の徳のついでにたのむこと
くのついでにたのむこと

移雁と氣のついでにたのむこと

と何れもついでにたのむこと
たのむこと
たのむこと
たのむこと
たのむこと

おとよのほろほろのついでに大なる例あり
苗のたのむこと
大なる例あり

胸か—ついでにたのむこと

十八丁の岩屋を九文とてたのむこと
ついでにたのむこと
ついでにたのむこと
ついでにたのむこと
ついでにたのむこと

十三

十四

十五日 王子權現

伴後とすまき 綴 丹 瑞 祭

於

十六 卯酒 拂曉より津より雨

雷乃光るまはやく 後生ま

いやくと 塵土 端の 秋

三 檜

こころし ちよとらきふ 扇を

西京 拾山

湖の舟す 河内 梅らる 扇 谷 仙白

南山

身玉羽のおお けり 物 枝の 際

成雅

姥控へ 白雲の 山で 河内 扇

素水

蓮沼の 梅の 扇 河内 扇 カヒ

才松

よるの 涼し 吹やて 扇

竹云

柳の 斗ま 扇 音 扇

大岳

道 幸 吹 世 花 河 水 扇 意

梅雪

細く 扇の 意 扇 意

精知

十七日 福喜翁志公の孫宗

豊公の筆

系

この歌可多し百しの心かた

京つらま

あなをたふたよまの心かた

るたのし

管下の竹の吹く声。光るな

たぬ

うらなひのこたまりの竹の

え

はなをたふたよまの心かた

す

うらなひのこたまりの竹の
四季満足せむ。竹の心かた

竹の心かた

竹

十八 夢想

七つを解通すすまき雁この
白しと多める。雁ハ雅と音子
抱し指と世ハさしめてく
しと解しきそ好き名とす二世ハ
かへまほえ三世ハ雁と龍と早て
とつ人お國うたぐ

芦刈け雁あうまあ月の
枝々の今まうりらあ松心 クラコ 其松
活葉の梅芽をうけ信る 尾ハ 素坊

ひとこし中のうめりあ月の フシコ 乙人
枝々のあまの風の吹くこと 月表
まはれ世を是く川の山あ 上モ 乙歌
何のよまこり 下サ 素坊
鶴まけ八 ヒメキ 一扇
松中 浦カ 竹政
まのこの水の色 イハミ 袋坊
くらがら イハミ 袋坊

大魚や猿人ひらう枝の音 下毛 苔

松の根や猿の足らう山 前シ 洞

石の窟を子に投し 前シ 遠音

赤田部はたふ

接子の聲 岩シロ 兎山

猿の 陸セシ 塵

か 石カ 岳

猿 ミナ 風儼

鬼院

猿の カヌマ 一矢 エキセシ 翠

ときあまきし

ま 指所

は 源

を 本

林 穴

夕 海

是のしづまをさひりあ月 次 雲所

血京あむ

まきまき 都なるの山智 美山

十九日 耶麻のあ師とヤシとりまき壺の注經

殊字の好徒やの壺くしやうと
を序けしあましくらまその文二白

やまのあまや
何しこころ
くゆとつる

天台止觀 善言秘密 古も何所 院扉

古台命法蓮華經 ちととと 法所

新備所

との道をたひひるの世間や 於

栗津の祖廟より系ねて

賜しむ何水の村のゆ 大坂 文房

元々 美山の碑として仙果よりあむとま

正面 宗徳法師遊法
紅糸をうすまゆをまお日記

た 町末まらや吹やせしるゆ 宗長

万金集しりしは

次は世に思ふ人後分るは

控

元々 満百

みのり 也りあひまゝ母也

一夏満りのよりを

月の教をむこりて無一物

極南

志してゆくまよひ又母のこゝろの形世の中
きよは山このりて墓碑をいそが

とて一巻のりて一夏書画の日課
かゝるにいつく新花摘集成り
孝なまぬ無諍也

ふは 也百紅のむり也

深美

也加

三言四のたつた

何ぞのいふのいふを
なげまはる人何れか
るの山にいふは

花よりかき何んよあふかあそ

於

さういふあはれあししやあまを

新巻のいふけしき玉中言事

静和

かのはれねのふまやいり堂

思ふよりあはれ

あつたあんの一期あふ

於

閑興六哥仙

あつたあの中

祐翁

かし何んをゆめあはれあはれ

温るのあはれあはれあはれ

水織

崎と山をりしあはれあはれ

静和

かあつたあはれあはれあはれ

言

名日のあはれあはれあはれ

於

あはれあはれあはれあはれ

わ

新撰下

七

酒^ウとあて遠い砦の舟よつき
 姑種多かきこし時者多
 お風の泣くぬくの南府を刀
 むまのあまの家の相續
 織り手様と艶よの知りこ
 ちる所をともさるるあ
 まののきりけり月
 こゝもらるるに赤き畑
 富 於 音 於 音 於 音 於 音

花より咲のこちをいそがし
 ちる方の舟の果の入替
 糸組の子寺船よりゆくと
 ちき風色してよる言傳
 水明と一時を舟に俄る
 照射さるるなる音
 羞月の彌の葉の枕もれ
 何代にのりぬき尾し
 富 於 音 於 音 於 音 於 音

新撰下

七

新古今

下

後書しゆらぬ海のつらき
 氷をこぼれし川を
 とくらのつらき其て川を
 ぬらふなるし海を
 怖れし代ふきふ古鳥
 利の度もして山海を
 ぬらふつらきし海を
 住らぬしこの廣なる林
 於 市 於 市 於 市 於 市

^{ナリ}
 河をこぼれし海のつらき
 いせをこぼれし海を
 横をこぼれし海を
 ぬらふつらきし海を
 子ぬらの海をこぼれし海を
 ぬらふつらきし海を
 於 市 於 市 於 市 於 市

新古今

下

歌

とみつひの鏡の輝かぬ
 梅幸
 恋もいさよまよふ人の心
 ちの仙
 手ゆくと花の緒つけく
 是好
 首とゆし兼も
 お樹
 花のちゆく

お月おちる

ちよきやまのふかき
 持春
 昔笠掛のち綿の極付
 お
 豆齋にせむきうの舟屋
 お
 くの土糸の買ふ事
 お
 存の流るるのたしと
 お
 花の葉のほの光る

新編よもやき梅の氣くく
 きのふの所は回る月乳
 下馬先の氣分廣くはじ
 傷をいふはよこの端の
 公身之よせくまゆはせしす
 中まろく一ぬき善持ちの種
 もあぢの穢牛のそふ一自らこ
 城よこし包して涼む木の根

永 在 亦 在 亦 在 亦 在

ナウ

わらうくと梅の海りるは
 種く遊遊く一あの上居草
 算盤くさうれの言一こ込て
 借残祝らするよ借せん
 四季咲の花をいゆらよ持せん
 七はらうととも寄いむ

亦 在 亦 在 亦 在 亦 在

一むしーんらむらそと益頭
 浅草生あふは池は移るな
 杜まや河の磯をそく水の音
 雑砂のふさめをそくあきん
 夕張くそく着るのゆきり
 凡そのとくそく涼板身

其傍
セ水

其く雄
 後翁
 信兄
 賦折
 鮮商
 採むめ

五月十八日す燭

詢意高

飛石のつる池を危のこぼれをそ
 庭よりの池る夏のぬき燭
 甚る所の檜をそくそく角とら
 移川ぬきそくそくのたき
 あまふて月の勢向のそくそく
 むしーんらむらそと稲の折時

其く雄
 高
 言
 言
 言

新編下

伴下ふ姓の母の及こし

さみのまをのまをうを

あうしの木端の軍馬かめ

舞のまをのうち

二三帖言ふぬけの海はれ

たうまをの海し所は電

月を向く影さつての意のま

把りすまをのまをのまを

言

言

言

言

言

言

言

言

ナウ

踊り着のまをのまをのまを

吃ちまをのまをのまを

とらうまをのまをのまを

寝まをのまをのまを

時よとたのまをのまを

世のゆまをのまを

言

言

言

言

言

言

新編下

新編下

蘇州

菊の下のや粗おれ花々々
さうさうたるもつちあつた
ひるやうき草らうき草
あけのよのよの伸所
まのついでに流し

永年
梅
ツシマ
英富
下ナ
熊溪
岩
吾泉

梅年

花の下のや粗おれ花々々
さうさうたるもつちあつた
ひるやうき草らうき草
あけのよのよの伸所
まのついでに流し

碧海
氷控
身江
蓮舟
秋城

蘇州

蘇州

新編稿下

五

姑の向り尋ら昔のつらく
一昔のふりし、殊のつら
無、流るる名、と、答、け、け
す、ま、向、端、を、採、り、ま、ま
待、合、ま、耳、ら、り、を、取、り、ら、り
こ、も、ら、り、地、の、こ、も、ら、り、お、お、
枯、叶、ふ、さ、ら、り、新、か、く、三、つ、の、月
ま、ま、い、い、あ、の、ま、控、打、ま、か、す

石 海 控 江 州 嶺 石

採、也、ら、初、子、扱、ら、上、ま、た、り
價、ら、け、ぬ、ら、り、此、ま、の、道
川、ら、ら、ら、り、既、ら、花、を、世、也
さ、ら、ら、ら、り、あ、ま、の、名、を、又、考、の、山
乾、ら、ら、鼻、の、ぬ、ら、ら、り、ひ、り、離
か、ま、考、ら、り、の、世、帯、ら、ら、ま
初、卵、を、ぬ、ら、り、新、か、く、十、五、の、
招、め、け、ら、り、ま、ま、は、り、ま、ま、と

石 海 控 江 州 嶺 石

新編稿下

五

新編

六

次の日のお加方日とて接か申す
けしきとあしよ返す日錦
か梅屋のけしきと接か返す所
旅立送る馬のけしき
接か、歌子のけしきを返すと接
つとて著とてお接のけしき
満ちての歌の八月十四日
色とりと返す麻のけしき

磯 手 石 海 松 江 州 磯

けしきとあしよ返す日錦
舟をとりまの船のけしき
と接か、接か返す日錦
けしきとあしよ返す日錦
けしきとあしよ返す日錦
けしきとあしよ返す日錦
けしきとあしよ返す日錦
けしきとあしよ返す日錦

更 中 石 海 松 江 州

新編

六

新編

新編

花のこゝろ 草の香しき 高の香
 竹のまの 親の 都の ぬれ
 春の 山 けの けの けの
 山 葉 木 葉

ゆず茶催し

弓雲

花のこゝろ 草の香しき 高の香
 竹のまの 親の 都の ぬれ
 春の 山 けの けの けの
 山 葉 木 葉

新編

新編

新撰稿下

徳島(海)はさうな母なり
大札ぬきくやる薬を法
君の君のひよのすりよき東な
回し言はぬ縁先の恵
土窓の明きまの海の中
裾キヨの扱りのるゆる襪子
戯法の注をぬくうその作
山の上なるも木根ぞつ分

年 定 於 年 定 於 年 定 於 年 定 於

海道の秋を引て玉寄達し
境をぬきぬく細を留せる
毛の或目ぬきむむほ中を
きくぬれ子まぐら筒子の丸
伊豆の山を何ぞは揺りやり
様にならぬ道ぬ菜の上へ
と時分子をぬきぬく後日
さしぬく軍をぬきぬく

年 定 於 年 定 於 年 定 於 年 定 於

新撰稿下

終

蘇州下

輕^ろくして掃^はき出^して了^りてあけりや
とこても惜^しむるお六條つ目
控^かひの梅^うの枝^えをさくらん
うら^らふ京^きの甲^か舎^{しゃ}しん
を城^じぬりて壺^かを注^つる
水^み任^じさるるそらあけり
室^むの控^かひとさうは月^げ見^み
一^いは只^{ただ}あふ来^きりさふ昔^{むかし}

年^{とし} 於^お 是^{こゝ} 年^{とし} 於^お 是^{こゝ} 年^{とし} 於^お 是^{こゝ} 年^{とし} 於^お 是^{こゝ}

い^いは^はけ^ける^る明^あく^く葉^は山^{さん}字^じの^の樂^がき^き地^ぢ
あ^あい^いの^のあ^あら^らず^ず讓^やる^るあ^あら^らず
と^と所^{ところ}さ^さと^と呼^よぶ^ぶと^と月^げの^の島^{しま}遠^{とほ}く
と^と盃^{さかづき}出^でて^てと^とあ^あら^らず
沖^お換^かち^ちの^のさ^さな^なは^はな^なに^にあ
桂^{けい}舟^{ふね}芝^{しば}の^のさ^さな^なは^はな^なに^にあ

年^{とし} 於^お 是^{こゝ} 年^{とし} 於^お 是^{こゝ} 年^{とし} 於^お 是^{こゝ} 年^{とし} 於^お 是^{こゝ}

新撰稿下

共

新編 雑下

自田川 紅葉の落葉

中根あり代り かり建し
る 陽よ句をいして

とみ 紅葉の如く かなの如

魯文

叶 菊

照啼 紅葉のふきの影淋し

王子

魯山

船底の目え かなのよこやの輝

イセ

果 蕉

淡くぬき かなをやり 也 柿の如

去 江

八百五

舟の 周るも ちかて ちか葉

静 五

尾 花の ちかて 雨の 降也

水 橋

秋 寒く 伏ふも 誰か 位 中ん

忍 一足 なくも 持くら

控 五

懐 かく 忍切 後 申し ごと

外 ありん かなを ちかて

於 五

新編 雑下

五

蘇州府志

卷之三

浦を移ふあねの雀の羽を^うて
 かしらぬるは舟を結
 遊ふそ尾のよきといふも人の
 無程海とある虎あやまき
 くらうし知自よ草履のよき
 尾よき舟のあやまき
 家の敷のあやまき
 袴の葛ハくらうる

五 於 五 於 五 於 五

白木を飛葉まのりの高きく
 石段のあやまきのうき
 老稚名ぬねをこらうし
 尾をりすまふまのあやまき
 壬生村のあやまき
 あまのら先のあやまき
 平目のあやまき
 涼のあやまきの石葛

五 於 五 於 五 於 五

蘇州府志

卷之三

新刊

世

發張の甚き剛徳平川に於て
くせ活好の金成や
占の處にあらざるまの處
懐もくあはしめ根のなき
茶焙の程のあはし一燈り
野原の層あはしとゆ
夕月よ市の買ものかたさゆ
松の隙中てととくあ袖

五 於 五 於 五 於 五 於

水音の暮の古りの五十年
くせのくせの持の原坊
ト恒のつ並たうくを持し
白雲のあはしを何
こそ何のいふく見らまの何
新のくもつく糸持のあ

五 於 五 於 五 於

新刊

世

新花摘 卷下 祭東九月

し海通中 昭信阿部所書

大乘行
者天諱

新花摘 乾坤一尾

夕立や田返りんせくろし神垣の
かきくよももる其角堂のありお
こし道のおやなる室井晋子の
親びおもひの孝志越くそく
なきたらちぬお為よ一夏百句以
ものしく新花摘集と名づけ
蛙とびも古池の濁しよよの
とちよ葉のそらしくい言れ葉

新刊

の老成子向たるハ風流なる
とりとまなき大功德と也
いんおのり
台心法師ハ多田孝泉
也
川月雪花
とふひのこ也
友となる巻也

○其角堂編輯書目

冥々細道 其角翁 一冊 俳諧又名字 二冊

俳諧繪入八巻題 四冊 同 日又左巻 二冊

發句五百題 四冊 同 摺歩行 一打

明治十六年十一月九日出板 御届同十二月出板

編輯兼 出版人 晋 永 機

南葛飾郡小梅村六十四番地

發賣人 杏 寄 半 造

浅州區須賀町十九番地

